

一期一会

耕人塾では、指導方針の一つに「日本の伝統文化を体験させ、自然や郷土を愛する心を育て、礼儀作法を身に付けさせる」ことを掲げて実践しています。そこで毎年、耕人塾の運営委員で茶道表千家仙台吉祥会会長の石田邦子先生から、茶道体験とご講話をいただき、その中で「一期一会」(いちごいちえ)の意味を教えてくださいました。

「一期一会」は、仏教語で「一生涯」を表し、「一会」は、「ただ一度の出会い」を意味しています。つまり、一生涯でただ一度の出会いを言います。その日に会った人とは、今後もう二度と会えないかもしれないので、その人との時間を大切にしましょう、と解釈しているようですが、この言葉の本当の意味は少し異なるようです。たとえ毎日顔を合わせる家族や学校の友人、職場の同僚であっても、“その日その時の出会い”は一生に一度だけで、二度と同じ日や機会が戻ってくることがない、という意味があります。おもてなしをしていただいた時の器などにも出会いがあります。

「一期一会」は、千利休の弟子の一人である山上宗二が記した『山上宗二記』の中に、「いつももの茶会であっても、臨む際は一期に一度のものとして心得て誠意を尽くせよ」といった一文が最初であると言われています。そして、この言葉を広めたのが、江戸幕府の大老で、茶人でもあった井伊直弼です。著書『茶湯一会集』に次のような文章があります。「そもそも茶の湯の交會は、一期一会といひて、たとへば、幾度おなじ主客交會するとも、今日の會に再びかえらざることを思へば、実にわれ一世一度なり。」(たとえ同じ人と何度も茶会で同席する機会があっても、今、この時の茶会は一生にその日ただ一度のこと。二度と同じ時に戻ることにはできない。だから一回一回の出会いに対して心を尽くして臨まなければならない)と述べています。

私たちの人生は、出会いの連続です。家族や友人、仕事仲間などたくさんの人たちとの出会いがあります。たとえ毎日同じ人と同じ場所で、何度出合いを重ねても、やはり毎日が「一期一会」で同じ日はなく、戻ることもできません。

私自身の幼少期を振り返ってみると、家の中には祖父母がいて、両親がいて、弟がいて、学校にいけば友人がいて、いつも皆が周りにいて、同じような風景がいつまでも続くように思っていました。永遠に続くことはないことは分かっていたながら、なんとなくこのままの状態が続くように思っていました。しかし、祖父母はいなくなり、友人とも別々の道に進むようになりました。その当時を思い出すと、二度と戻ってこないその日のことが大切な日々や人々だったことに気付かされます。

耕人塾の毎回の活動を振り返ってみても、全く同じことを繰り返すことはありません。だからこそ、常に人生で一度きりと心得て、精一杯の誠意を尽くしていきたいものです。それは、塾生の皆さんとの出会いの中に、「一期一会」があるのかもしれません。

塾生の皆さん、今回の茶道体験を通してどんな「一期一会」があるのでしょうか。改めて、自分自身の「一期一会」を見つめてみたいものです。

先日、東京国際フォーラムに出かけた折り、同じ建物に併設している「相田みつを美術館」を見学してきました。書家・詩人として、自分の書、自分の言葉を探求し続けた相田みつを。気付かされた作品を紹介します。

